1960 年代～70 年代の前衛的な舞踊と江口隆哉
－体育大学教師の視点から－

髙野美和子（日本女子体育大学）

１．はじめに

1960 年代にポストモダンな舞踊の出現によって、芸術舞踊の在り方を根本的に検討することが生じるようになった。そこで本研究は「日本のモダン・ダンスを牽引するとともに、普遍性をもった日本の舞踊創作論を構築しようとした」（桑原 2015）江口隆哉が 1960 年代から 70 年代に現れた前衛的な舞踊、中でも舞踏やポストモダン・ダンス、即興的なパフォーマンスをどう捉え、その当時どのような舞踊観を持っていたかを明らかにし、また江口がこの舞踊観を持つようになった背景に、彼が体育大学の教師の立場であったことがどう関係するかを検討していく。

作業手順としては、先行研究、関連文献、江口の著書、言説を検討し、彼の直弟子で舞踊家の金井芙三枝、正田千鶴、江口の許で学んだ後に独自の舞踊を展開した大野一雄、笠井叡、日本におけるポストモダン・ダンスの先駆者である厚木凡人、舞踊評論家の山野博大らへのインタビューを使用する。

２．学校体育への創作ダンスの導入と江口隆哉

第二次世界大戦後すぐに日本の学校体育にモダンダンスの理念に基づく創作ダンスが導入され、江口は文部省関係者や学校現場の教員、研究者から創作ダンスの指導について助言を求められる立場となった。また江口は自身の舞踊活動と並行して、1948 年から日本女子体育専門学校（現日本女子体育大学）で教鞭をとり、将来体育教師となる学生たちへダンスを指導した。この時期江口は自身の著書『學校に於ける舞踊』で、學校に於ける舞踊が創作的で藝術的な方向に転換されたことは悦ばしいことであり、藝術舞踊と學校に於ける舞踊とは同じものであると述べた。またモダンダンスの特徴は、個性的に把握された思想や感情がリズミカルな肉體運動とその構成を通じて創造的に表現されることで成立する藝術的な世界にあり、この肉體運動は美的で合理的な自然運動である必要がある。そしてこの自然運動は連続された調子のよいリズミカルな運動となり、強調、制約、整理され、統一と変化を含みながら個性的な構成を含む舞踊であると説明している（江口 1947）。このような考えの下、彼は創作ダンスを踊るための体づくりとして自然運動に立脚した「基本運動」を考案し教育現場へ広めていった。

３．体育における創作ダンスの混迷と江口の反応

一方、学校体育の現場では、戦後の創作ダンス導入の転換期から 1960 年代にかけて、創作ダンスは芸術か体育か？創作ダンス授業では体力が養えるのか?など、舞踊の体育的価値をめぐってその在り方が問われ論じられた（松本 2000）。さらに 1964 年の東京オリンピックが近づくにつれて体育における基礎体力の向上が叫ばれるようになり、創作ダンスの存在意義がより問われることとなった（中島 1964）。この状況下で江口は 1965 年から 10 か月にわたり、学校体育の研究誌『体育科教育』に自身のモダンダンスの理論を用いた創作ダンスの作舞法を連載した（江口 1965, 1966）。

４．1960 年代から 70 年代に現れた前衛的な舞踊に対する江口の考え

江口が体育研究誌に創作ダンスの理論とその意義を表明していた 1960 年代に、モダンダンスとは異なる新たな舞踊が出現し始めた。その代表的な舞踊として、舞踏やポストモダン・ダンスが挙げられる。これらの舞踊は表現することやダンシングすることを敢えて否定するという特徴を持つが、江口はこれらの舞踊を、自身が主幹し多くの学校体育のダンス指導者が読者となっている舞踊研究誌『現代舞踊』で、舞踊作品に必要な公理的なことを無視した舞踊不在の舞踊であるとして、批判的な立場を明らかにした（髙野 2018）。

５．考察とまとめ

1960 年代に学校体育の現場で自由自在に踊れるための「基本運動」やテーマに沿った表現、構成の探究を推奨していた江口にとって、同時期に現れたダンシングしない舞踏やポストモダン・ダンスは、彼の実践するモダンダンスや学校体育の創作ダンスとは相容れない舞踊であった。しかし、元々江口自身は前衛的な取り組みに肯定的であり、かつて彼自身も踊り手の登場しないダンシングのない斬新な作品を発表した過去を鑑みると、芸術家としての江口はこれらの前衛的な舞踊に内心注目していたとしても、体育大学でしっかりと踊る舞踊を教えていた教師としての江口は、これらの踊らない舞踊を認め難かったのではないだろうか。ここに垣間見える江口の芸術家と体育大学教師との間に立つジレンマを見いだしたい。

【引用文献】

桑原和美:片岡康子監修(2015)「 江口隆哉・宮操子−高らかに舞踊創作の灯をかかげて」,『 日本の現代舞踊のパイオニア - 創造の自由がもたらした革新性を照射する - 』.新国立劇場運営財団情報センター,72.

江口隆哉(1947) 『學校に於ける舞踊』明星社,3,43,10,12-13.

松本千代栄（2000）「江口隆哉と舞踊教育回顧」,金井芙三枝,島内敏子,若松美黄編,『江口隆哉生誕 100 年祭記念 江口隆哉の業績と日本女子体育短期大学体育科舞踊専攻が日本のモダンダンスに果たした役割』.日本女子体育大学,22-24.

中島花（1964）「学校ダンスの諸問題」,体育科教育第 12 巻 8 号,3-7.

髙野美和子(2018) 「江口隆哉の舞踊研究誌『現代舞踊』に展開される前衛的な舞踊の考え」,比較舞踊研究,24:43.